

コラムの目次

コラムの執筆者は今泉喜一

- コラムE1 国語文法への5つの質問 (7)
- コラムE2 国語文法の断捨離すべき不要な概念, 用語 (20)
- コラムE3 国語文法は裸の王様? (44)
- コラムE4 日本語は幸いにも膠着性を保つ (58)
- コラムE5 日本語構造伝達文法は唯一の日本語科学文法 (77)
- コラムE6 形態素こそが基本 (78)
- コラムE7 文法ホームページの突然の消滅……更新 (88)
- コラムE8 「日本語構造伝達文法」の著作 5+6 (126)

国語文法への5つの質問

国語文法に対して質問がある。この論文で扱ったことが中心になる。以下の5項目につき、回答が得られれば幸いである。

[1] 文法の分析に「かな」を使う根拠は何か。

- ・なぜ、拍が単位となる「かな」で分析するのか。その根拠は何か。
- ・「未然形」を設置する理由を説明してほしい。
- ・「かかされた」の「さ」はどう説明すればよいのか。
- ・可能動詞（「よめる」等）が可能を表すことは、どう説明するのか。

[2] 国語文法のいう「形態素」は名詞関係だけのようである。動詞や形容詞、態には形態素はないのか。

- ・国語文法が動詞などで「形態素」を重視しない理由を説明してほしい。
- ・「よむ」は「よ・む」が正しくて、yom-u は誤りか。
- ・形容詞の .k- という形態素についてどう評価するか。
- ・態の形態素、特に「許容態」 -e-, -ur- について、どう評価するか。

[3] 国語文法では「格」をどう捉えているのか。その根拠は何か。

- ・国語文法の「格」の定義は意味があるか。西洋文法を参考にしたものか。
- ・国語文法で、「名詞」と「動詞」の論理関係を表す概念、用語は何か。

[4] 時(テンス)と相(アスペクト)の関わりについてどう考えるか。

- ・国語文法では、時(テンス)と相(アスペクト)をどう定義しているか。
- ・国語文法で、時(テンス)の図示は可能か。
- ・国語文法で、相(アスペクト)の図示は可能か。
- ・国語文法で、時(テンス)と相(アスペクト)の関わりを図示は可能か。
- ・相対時表現は、日本語でも特に現代語に特有のものか。

[5] 動詞は歴史的に活用が単純化した。この事実はなぜ起こったと考えるか。

- ・国語文法では、「動詞の活用の単純化」を「目的」として説明するのか。
- ・態拡張により必要な動詞が作られたという考察をどう評価するか。
- ・「動詞の活用の単純化」は「目的」ではなく、態拡張の「結果」ではないか。
- ・「係り結び」の現象は「動詞の態拡張」抜きに考えられないのではないか。

コラムE2

今泉喜一

断捨離すべき不要な概念、用語

国語文法には、日本語構造伝達文法の視点から見ると、不要な概念、用語がある。この論文に関係するものの一部だけを取り上げる。

■ たとえば、「未然形」である。これは定義のしようがない。未然形は「書かせる」の「書か kak-a」の部分であるが、-a が何か意味を持っているだろうか。

「花咲かじじい」の「咲か sak-a」に -a があるが、これは「咲かせ sak-as-e」の略であるので、-a は原因態詞 -as- の一部なのである。……ちなみに、「書かない」は kak-ana.k-i であり、「書かれる」は kak-ar-e-ru、「書こう」は kak-oo である。

どこからも -a という形態素は出てこない。したがって、「未然形」は定義できない。「未然形」は不要な用語なのである。

■ また、「上一段活用動詞」というが、これは「落ちる oti-ru」のように動詞末が i で終わることを意味しているにすぎない。「i 末動詞」のほうが適切である。

同様に「下一段活用動詞」も不要。「やせる yase-ru」のように動詞末が e で終わることを意味しているだけだからである。「e 末動詞」のほうが適切である。

「五段活用動詞」は、「取る tor-u」のように動詞末が子音で終わっていることを示すだけである。「子音末動詞」のほうが適切である。

「上一段活用」「下一段活用」「五段活用」は、動詞が正しく捉えられない「かな」を使う国語文法だからこそ必要になった用語である。

■ 古語の「四段活用動詞」は子音末動詞である。「上二段活用動詞」、「下二段活用動詞」は、奈良時代から鎌倉時代までは「3形末動詞」、鎌倉時代から江戸時代前期までは「2形末動詞」であり、江戸時代後期以降は「1形末動詞」となった。

表Eコ-1 動詞末 (3形, 2形, 1形)

	咲く sak-u		起く ok;Ø-u		寄す yos;Ø-u				
奈良～鎌倉	四 段 活 用 動 詞	子 音 末 動 詞	s ak-	上 一 段 活 用 動 詞	3 形 末	ok;i- ok;Ø- ok;ur-	下 一 段 活 用 動 詞	3 形 末	yos;e- yos;Ø- yos;ur-
鎌倉～江戸前期					2 形 末	ok;i- ok;ur-		2 形 末	yos;e- yos;ur-
江戸後期以降					1 形 末	ok;i-		1 形 末	yos;e-
	子音末動詞		i 末動詞		e 末動詞				

■ 「格」は「実体と属性の論理関係」と定義したので、「連体格」は矛盾していて、不要。「格」とは「連用格」のことなのだから、「連用格」もいらなくなる。

国語文法には必要であっても、構造伝達文法の観点からは、断捨離して整理すべき不要な概念・用語が多い。

コラムE3

今泉喜一

国語文法は裸の王様？

国語文法を考えるときに、「裸の王様」を思い出す。誰もが知るアンデルセンの童話である。

[裸の王様]

ある王様が2人の詐欺師にだまされて、「おろか者には見ることのできない服」を作りました。王様はこの服を着てパレードを行いました。すると、見物人たちは、おろか者と言われないうために、美しい服だとほめそやします。しかし、ある子どもが、「王様は裸だ」と言うと、人々の間に「やっぱり」という思いが伝わり、みな「王様は何も着ていない」と言うようになりました。王様も、自分のだまされていたことに気づきましたが、パレードをやめるわけにはいきませんでした。

この物語は、周囲にいる人が、的確な助言ができない／しないと、王様も自分を見失い、ついには大恥をかく、ということを書きたいのである。

[日本人も裸の王様？]

実は、日本人は、王様（国語学者）の言うまに信じて、この大恥をかいているのである。どこか変だと思いつつも、自分をおろか者と言われないうにするために、王様の着ている服をたいそう美しい服だとほめたたえているのである。

[国語辞典を開こう]

国語辞典を開いてみれば、すぐに気がつくことである。動詞の扱い、たとえば、「読む」という動詞の扱いであるが、「よ・む」というふうに載せてある。意味は、「よ」が語幹で、「む」が語尾ということである。そんなばかな扱いがあるものか。

a) よ・む b) yom-u

a) と b) では扱いが全然違う。当然 b) が正しい。では、なぜ a) があるのか。これは、日本人が文法を「かな」で考えてきたからである。科学的根拠はない。日本人はずっと非科学的なことをやってきたのである。裸だったのに、自分がおろか者だと言われないうために、とても美しい服を着ていると思いつんで来た。

[日本人は？]

こんな大恥をかいているのに、日本人は、2～3の小声で主張する人を除いては、誰も、「王様は裸だ」と言う人がいなかった。

国語辞典は全部 a) で扱っているのだから、国語辞典の大々的な修正が必要となる。日本人は賢いから、修正はすぐにやれると思う。君子豹変。

しかし、日本人は、案外このまま修正しないでいくかもしれない。もし、そうなら、日本人をどういう人間と考えればよいのだろうか。分からない。裸の王様？

日本語は幸いにも膠着性を保つ

屈折語は優れている？

『日本語構造伝達文法・発展D』に、私は「格表示は名詞と動詞の間でなされる」と題する論文を書いた。その一部にこのような趣旨のことを書いた。

ラテン語では、**dominus** (主人) と言えば、この語末の **us** で、主格・男性・単数であること、つまり、3要素を一挙に示せてしまう。これは屈折語の特徴である。これが屈折語の優越性とみなされることがあった。

論文ではそのあと次のように続けた。ラテン語は名詞後部に情報を盛り込みすぎたために、名詞後部が複雑になってしまった。そのため、動詞を、紀元前後ごろに、名詞の前に出し、名詞と動詞の間に創出した前置詞に、名詞後部の格情報を移した。名詞後部は単純化した。もし、ラテン語のような屈折語がほんとうに優れているのなら、なぜ、このようにしてこの特徴を消す必要があったのか。

格以外の要素は？

論文では触れられなかったが、名詞後部にあった他の要素、性と数であるが、この情報は冠詞と、より単純な複数形を作って表示することになった。(これを言うためには、もう少し調査と考察が必要である。)

ロシア語の不徹底

論文ではロシア語にも触れた。ロシア語は、先進国イタリアのラテン語同様、前置詞を持つようになったが、名詞後部の格の要素も残した。イタリアほど改革が徹底していなかったわけで、逆に言語がいつそう複雑になってしまった。改革が徹底しなかったのは、先進国の表面的なまねに終わったためではないか。

言語として優れているとはどういうことか

言語として優れているとはどういうことか。論文から分かることは、単純であることである。言語はひとたび複雑化すれば、単純な形に戻そうとする。その戻し方は、ラテン語の場合、動詞を名詞のまえに出し、動詞と名詞の間に創出した前置詞に格を移すことによって、複雑化した名詞後部を単純化することだった。

日本語は幸いにも膠着性を保つ

日本語は幸い膠着性を保っており、文法的要素を名詞のあとに順次付けたしていく。このような膠着語の特徴は、文法要素の透明性が高く、文法構成が分かりやすいということである。これが人類の元来の言語の姿であった。印欧語も元は膠着語であった。

日本語は膠着性を保っており、単純化することこそあれ複雑化はしていない。だから、印欧語のような語順を変えるほどの改革は、まったく必要がなかった。

日本語構造伝達文法は唯一の日本語科学文法

[国語文法は科学でない]

国語文法というものがある。長い伝統につかわれた文法であり、学校でも教えられている。しかし、国語文法は科学か、と問うとき、答えは否である。

[欠陥のある伝統]

長い伝統というものは、その中に致命的な欠陥がある場合、人々がその伝統を大事に受け継げば受け継ぐほど、誤謬をますます大きくする。権威主義の強い日本であれば、なおさらのことである。

[研究者も教育される]

学校で教えられている国語文法は、日本人に共通理解をもたらした。中に含まれている致命的欠陥にも気づかず、日本人はまじめにそれを受け継いだ。それはますます権威として立ち現れることとなり、その結果、それをよりどころに育つ研究者たちは、自然と、その権威に敵対する論議をしないようになった。

[国語文法の世界で重要なこと]

科学の世界であれば、議論を評価する基準は、現実をうまく説明できるかどうかということである。……国語文法の世界は違う。現実の説明は、しょせん出来ないのだから、しなくてよい。現実の説明よりは、もっと重要なことがある。それは、権威者の議論に沿った形で議論が進められているかどうかということである。このほうがずっと重要なのである。

[国語文法は科学ではない]

現実の説明しなくてよい。したくても方法がないのだからしょうがない。……この態度が、国語文法を科学から遠ざけた。国語文法には、このように、そもそも現実を説明しようという気構えがない。説明の方法を模索しようという意欲もない。……現実を説明することを放棄しているのだから、国語文法は科学ではない。こう結論づけざるを得ない。

[日本語構造伝達文法は唯一の日本語科学文法]

日本語構造伝達文法は、現実を説明することに正面から向き合っている。

- ① 生物は事象を集合として捉える
- ② 形態素を明確にする
- ③ 判断の構造を明らかにし、その表層化の方法を明らかにする
- ④ 歴史的な言語変化も考慮する
- ⑤ 音声変化も考慮する

このように考えて、説明方法を確立した。このような文法はほかにない。

文法ホームページの突然の消滅……更新

文法ホームページの突然の消滅

日本語構造伝達文法のホームページが突然消滅した。サーバーの提供会社の都合によるものだが、ユーザーである私の方へは何の連絡もなかった。したがって、まったく突然のことだった。(しかるべきところには掲示があったようだが。)

文法ホームページを見てくださる方からも連絡をいただいた。

しかし、これは、ホームページを作り変える絶好の機会かもしれない。

新ホームページ

① すべての本の掲載

まず、これまで出した本を全部掲載して、読めるようにする。

このホームページの目的は、「日本語構造伝達文法」の理論の紹介である。旧ホームページでは、この目的のために、『日本語構造伝達文法』の本2冊と、大学院での、アニメーション活用のパワーポイント教材、並びに「不思議ノート」等を載せていた。

しかし、このよい機会に、これまで出版したすべての著作を掲載し、サイトへの訪問者に読んでいただくことにする。いまの人は、すべてネットですませようとする傾向があるので、理論を知っていただくには、それが一番よいようである。中国語版、韓国語版も載せよう。

② 大学院教材をどうする？

旧ホームページに載せていた大学院の教材はどうしたらよいだろうか。載せれば、見てくださる方の理解の助けになるかも知れないから、やはり載せるべきか。載せる方向で検討するつもりである。

③ 研究会の案内

研究会は、月1回、八王子で開いているが、この案内は引き続き掲載するのがよいだろう。これまでも、この理論に関心を持ってくださった方が何人か、八王子という不便なところまでおいでくださった。

④ 日本語構造伝達文法の歌

これまで4曲の「日本語構造伝達文法の歌」を作詞・作曲して、『日本語のしくみ』の(2)～(5)に楽譜を載せてきた。どんな歌か知りたいという声もあったので、素人ではあるが、私が歌うことにした。(へたなところは、ご愛嬌ということで、お許し願いたい。)演奏のみのものも載せるつもりである。

このホームページは2021年4月ごろには開始できるだろう。しかし、私自身が明日をも知れない年齢だから、今度はそれが理由で、突然なくなるだろう。

コラムE8

今泉喜一

「日本語構造伝達文法」の著作 5+6

「日本語構造伝達文法」は現在、以下に記すように、5冊の入門書と、(本書を含む) 6冊の研究書を出している。

[入門書]

- ① 『日本語のしくみ(1)－日本語構造伝達文法S－』 2015
構造の基本・複主体/複主語・態
- ② 『日本語のしくみ(2)－日本語構造伝達文法T－』 2016
テンス/アスペクト・絶対/相対時
- ③ 『日本語のしくみ(3)－日本語構造伝達文法U－』 2017
形容詞(構造・複主語・否定・時間)
- ④ 『日本語のしくみ(4)－日本語構造伝達文法V－』 2019
テ形音便・古語時相・動詞態拡張
- ⑤ 『日本語のしくみ(5)－日本語構造伝達文法W－』 2020
構造形成力・格・の・実体分類

[研究書]

- ① 『日本語構造伝達文法』 2000 (2005, 2012)
構造の基本を扱う。(構造・態・アスペクト・テンス・複主語・否定等)
- ② 『日本語構造伝達文法 発展A』 2003
構造の基本を扱う。(主/を格・テ/タ・従文・修飾法・構造練習帳 等)
- ③ 『日本語態構造の研究－日本語構造伝達文法・発展B－』 2009
態を扱う。(原因/許容態・許容態の語幹化・態拡張24方式 等)
- ④ 『主語と時相と活用と－日本語構造伝達文法・発展C－』 2014
主語・時相・活用を扱う。(二重主語・うなぎ文・接続・時相・発話等)
- ⑤ 『日本語・中国語・印欧語－日本語構造伝達文法・発展D－』 2018
(語順<印欧語>・格表示・歩く/走る・無・語法アスペクト・4つの句)
- 本書⑥ 『日本語・中国語・モンゴル語－日本語構造伝達文法・発展E－』 2021
(国語学への提言・の/相対時・未・感覚動詞/知覚動詞・モ日の主格/対格表現・の/的・兼語句・「了」の日本語表現・粵語麻垌方言)